

## コロナ禍中の学生アンケート結果の変化の比較

長沼, 祥太郎  
九州大学教育改革推進本部

鄭, 漢模  
九州大学教育改革推進本部

野瀬, 健  
九州大学教育改革推進本部

<https://doi.org/10.15017/4773095>

---

出版情報：基幹教育紀要. 8, pp.137-153, 2022-02-25. 九州大学基幹教育院

バージョン：

権利関係：本紀要に掲載したコンテンツの著作権は、断りが無い限り九州大学基幹教育院が有します。コンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者に権利委託されているコンテンツの利用手続については、各著作権等管理事業者を確認してください。



## コロナ禍中の学生アンケート結果の変化の比較

長沼祥太郎<sup>1\*</sup>, 鄭漢模<sup>1</sup>, 野瀬健<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>九州大学教育改革推進本部, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

<sup>2</sup>九州大学基幹教育院, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

## Comparison of Changes in Student Survey Results during the Corona Pandemic

Shotaro NAGANUMA<sup>1\*</sup>, Hanmo JEONG<sup>1</sup>, Takeru NOSE<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>Education Innovation Initiative, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

<sup>2</sup>Faculty of Arts and Science, Kyushu University, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

\*E-mail: naganuma.shotaro.062@m.kyushu-u.ac.jp

Received Oct. 31, 2021; Revised Nov. 19, 2021; Accepted Nov. 30, 2021

This report compared the common items in the two questionnaires on online classes conducted at Kyushu University in 2020 and 2021. The following five findings were obtained: 1) there was an overall increase in student life satisfaction between 2020 and 2021; 2) when comparing the ease of learning in online classes with face-to-face classes, there was a slight increase in the total percent of "better", "slightly better", and "almost the same" for online classes; 3) the troubles with online classes decreased from 2020 to 2021; 4) a comparison of attitudes and impressions of online classes showed that faculty members and students seemed to be adapting to online classes, whereas negative trends were also observed seemingly due to "online classes habituation"; 5) with regard to points for improvement of online classes, there was a decrease in the number of opinions pointing out problems in all question items. These results may reflect the university's sincere efforts to implement online classes over the past year. On the other hand, certain issues still persist, so we pointed out the importance of continuing to address these issues in the future if we welcome online classes even after corona pandemic.

### 1. 背景と目的

2020 年前期より、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い国内の多くの大学でオンライン授業がこれまで実施されてきた対面型授業を代替するものとして広く実施された。この間、さまざまな大学で、いわゆるコロナ禍におけるオンライン授業や学生生活に関する調査が実施され、報告されてきた。

広島大学高等教育研究開発センター<sup>1</sup>では、全国の大学において行われてきたオンライン授業・教育に関する調査結果をまとめており、この間多くの大学でアンケート調査が実施されてきたことがわかる。例えば、九州大学<sup>2</sup>では、全学生を対象に調査を行い、「自分のペースで学習ができた（55%）」「大きな問題なく授業に集中できた（43%）」といった好意的な意見が見られた一方で、「目の痛み、腰の痛みなどの症状が出た（51%）」「自分の周りの環境が気を散らした（周りの人、救急

車の音、近隣騒音など(36%)」というようにいくつかの課題が浮き彫りとなった。また、早稲田大学の調査<sup>3</sup>では、オンライン授業の良い点として「自宅で学習できる(76.4%)」「自分のペースで学習できる(70.3%)」「通学時間を学習に有効活用できる(57.0%)」「復習が何度でもできる(48.4%)」となっている。一方で、オンライン授業の改善点として、「課題が多い(63.0%)」「目や耳に、肩など身体的な疲れをより感じる(61.8%)」「友達と一緒に学べず孤立感を感じる(58.1%)」「課題提出ができていないのか不安だった(52.9%)」が挙げられている。こうした調査の結果、オンライン授業自体の良さは一定程度認識され、一方でオンライン授業に関わる学習環境・生活に関する改善が求められることがわかった。このように、コロナ禍という状況における学生の状況の把握、生活環境や教育環境の現状の把握、そして、実施された教育の妥当性を評価するために、学生アンケートが多く大学の大学において重視されてきたことは論を待たないだろう。

一方で、これらの調査は単発で行われることが多く、比較可能な項目を用いて調査を行い、その結果を可視化してこのコロナ禍中での変化を把握した報告は限られている。その中でも、例えば、イギリスの Times Higher Education (THE)<sup>4</sup>が行った、コロナ禍前後の日本の大学教育に関する調査結果では、2017年から2020年までの調査結果を比較し、「クリティカル・シンキングのスキル伸長支援機会」や「学習内容を相互に結びつける機会」はこの間一貫して向上がみられた一方、「協働学習の機会」は2020年において減少していることを明らかにしている。日本学生支援機構<sup>5,6,7</sup>が行なった隔年調査では、「大学の授業の予習・復習、課題など」を週6時間以上と回答した学生の割合が、2020年11月の調査時は、前回調査時(2018年)よりも23.0%上昇していることを示している。また、学生の不安や悩みについてみると、例えばもっとも回答者の多い大学昼間部(n=20,086)では、「授業の内容についていっていない」「学内の友人関係の悩みがある」など計5項目に対して尋ねているが、2018年と2020年の調査間で結果に大きな違いはない。梶谷ほか<sup>8</sup>では、2019年と2020年に九州大学で行った調査を比較し、睡眠時間や体調、悩み、大学生活の満足度などを比較している。比較の結果、勉学上の悩みや友人関係に関する悩みが20%以上増加していること、満足度に60%程度の低下が見られることなどを報告している。

これらの調査の多くは、新型コロナウイルス感染症の拡大前(コロナ禍前)である2019年以前と、新型コロナウイルス感染症の感染拡大後(コロナ禍が始まってから)の一年である2020年を比較している。一方で、コロナ禍が始まって以降である2020年から現在にかけての推移を複数時点の調査結果を用いて報告したものは、本報告の執筆時点では管見の限り見当たらない。今後コロナ禍が収束した後もオンライン授業が大学教育の一端を担うことが予想される中で、コロナ禍以前との比較のみならず、このコロナ禍の中で学生にどのような変化が起きたかを定量的に把握することは、大学がとってきた対応がどのように作用してきたか、学生はどのように対応してきたか、そして依然として残された課題、すなわち今後改善が求められる課題は何かを把握する上で重要な作業と考えられる。

そこで、本報告では、2020年9月と2021年9月に九州大学で実施されたオンライン授業に関しての共通の調査項目を対象とし、この間の変化を検討する。また、ポストコロナにおける示唆を得ることも目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期と対象

本報告にかかる調査、調査対象、回答者数（回収率）は、表 1 のとおりである。2020 年の調査は全学生を対象にしたが、2021 年の調査は、回収の迅速性および授業の受講数の多さを考慮し、学部生のみを対象に調査を行った。そのため、学部生のみデータをとり出して本報告に用いた。加えて、これらの調査における同一の学生の回答がどのように変化したのかを把握するため、2 回の調査とともに参加した学生 294 名の回答だけを対象にして分析を行った。その推移を示した結果も以下では説明する。それぞれの回答者の学部および学年、共通回答者の割合は、表 2 および表 3 の通りである。

表 1 調査の概要

| 本報告における調査呼称 | 調査正式名                                   | 実施時期          | 対象学生             | 有効回答数              | 学部生の有効回答数（回収率） |
|-------------|-----------------------------------------|---------------|------------------|--------------------|----------------|
| 2020 年調査    | 新しい生活様式のもとでの大学授業の実態と意識に関する全学調査（1. 学生調査） | 2020 年 9-10 月 | 全学生<br>18,934 名  | 4,760 名<br>(25.1%) | 3,304 名        |
| 2021 年調査    | 令和 3 年度前期オンライン授業に関する学生アンケート             | 2021 年 9 月    | 学部生<br>11,699 人* | 838 名<br>(7.2%)    |                |

\*令和 3 年 5 月時点

表 2 学部内訳

|         | 2020 年<br>(9 月)<br>N=3,304 | 2021 年<br>(9 月)<br>N=838 | 共通回答者<br>N=294 |
|---------|----------------------------|--------------------------|----------------|
| 共創学部    | 3.6%                       | 4.2%                     | 4.4%           |
| 文学部     | 8.1%                       | 11.2%                    | 13.9%          |
| 教育学部    | 2.3%                       | 3.0%                     | 4.1%           |
| 法学部     | 6.9%                       | 5.6%                     | 4.1%           |
| 経済学部    | 6.3%                       | 9.3%                     | 8.5%           |
| 理学部     | 10.6%                      | 11.2%                    | 11.9%          |
| 医学部     | 7.8%                       | 3.9%                     | 1.0%           |
| 医学部保健学科 | 5.3%                       | 6.4%                     | 7.8%           |

|           |       |       |       |
|-----------|-------|-------|-------|
| 歯学部       | 3.0%  | 1.0%  | 1.0%  |
| 薬学部       | 3.9%  | 3.8%  | 5.1%  |
| 工学部       | 28.4% | 26.4% | 26.5% |
| 芸術工学部     | 5.5%  | 5.0%  | 4.1%  |
| 農学部       | 8.1%  | 8.9%  | 7.5%  |
| 21世紀プログラム | 0.3%  | 0.0%  | 0.0%  |

表3 学年内訳

|     | 2020年<br>(9月)<br>N=3,304 | 2021年<br>(9月)<br>N=838 | 共通回答者<br>N=294 |
|-----|--------------------------|------------------------|----------------|
| 1年生 | 38.7%                    | 50.8%                  | N/A            |
| 2年生 | 23.2%                    | 35.4%                  | 78.2%          |
| 3年生 | 20.3%                    | 11.0%                  | 17.7%          |
| 4年生 | 15.1%                    | 2.3%                   | 3.7%           |
| 5年生 | 1.4%                     | 0.1%                   | 0.3%           |
| その他 | 1.3%                     | 0.4%                   | 0.0%           |

## 2.2. 調査項目と分析方法

2020年9月の調査では、総計32項目、2021年9月の調査では、総計24項目が用いられた。このうち、共通して用いられた項目は表4に示す5項目である。

表4 共通項目

|   |                                                                                                    |
|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 現在、全体（学業面や生活面を含む）として大学生生活に満足していますか。                                                                |
| 2 | オンライン授業での学びは、対面授業（いわゆる教室での授業）と比べて勉強のしやすさについてどのように感じましたか。<br>（※学部1年生は、中学生や高校生等の時に教室で受けた授業と比べてください。） |
| 3 | オンライン授業受講時に、映像が見られなくなる、音声途切れる、など、受講に支障が出るような不具合が発生したことがありますか。                                      |
| 4 | オンライン授業を受講中や受講後に感じたこと、また、授業態度に関して、以下の各項目のうち、当てはまるものをすべて選んでください。（複数回答可）                             |
| 5 | オンライン授業に対する改善が必要と思うことについて、以下の選択肢からすべて選んでください。（複数回答可）                                               |

今回の報告では、これらの5項目についての結果を用いる。以下では、まず、2回の調査における全体の比較の結果を示し（以下、「全体比較」と表現）、その後、294名を対象にした共通回答者比較の推移を示す（以下、「共通回答者比較」と表現）。

なお、2021 年調査では、「令和 3 年度前期における」という教示文を項目 2-4 においては加えている。2020 年調査時には、念頭におくオンライン授業が 2020 年前期のものしかなかったためこのような教示は含めなかったが、2021 年調査時には、「2021 年前期」のオンライン授業に関してのみ回答を求めたかったため、このような教示を加えた。

なお、実際のアンケートにおいては、表 4 で示した順番で尋ねたわけではない。しかし、説明を簡単にするため、より包括的な項目である項目 1、2 から説明を行い、その後、より詳細な項目として項目 3、4、その後、オンライン授業の今後に向けての項目である項目 5 の順に説明を行なう。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 学生生活満足度

コロナ禍という未曾有の状況の中で学生が大学生活をどのように受け止めているかを知ること、大学としての対応、およびその効果を検討する上でも重要である。2020 年と 2021 年の調査を比較することで、この間に大学や個々の教員レベルで対応してきたことがどれほど学生生活の満足度に影響を与えてきたのかに関しても知る手がかりを得ることができる。

まず、以下の通り母集団推定を行った。母集団推定のため、「満足」を 5、「やや満足」を 4、「どちらとも言えない」を 3、「やや不満」を 2、「不満」を 1 とし、5 件法の間隔尺度と見なした。2020 年時、2021 年時の平均値は順に 3.305、3.443 であり、対応のない平均値の差の検定（Welch 検定）を行った結果、 $t(1350.242)=-9.611$ 、 $p<.05$  で有意であった。また、Cohen の効果量を算出したところ、絶対値は  $d=0.360$  であった。2020 年調査よりも、2021 年調査において満足度に向上が見られたことがわかる。より詳細に見るため、図 1-a に全体比較の結果を示した。2020 年調査時に比べ、2021 年調査時では、「満足」と「やや満足」を合計すると約 20%の増加が見られる。コロナ禍が始まる前の 2019 年 10 月に九州大学において実施された「2019 年度学生生活実態調査」<sup>9</sup>においては、2871 名の学部生が回答し、「満足している」「まあまあ満足している」の合計が 79.5%であった。このことを踏まえて、2020 年と 2021 年の満足度に関する調査結果を見ると、コロナ禍が始まってか

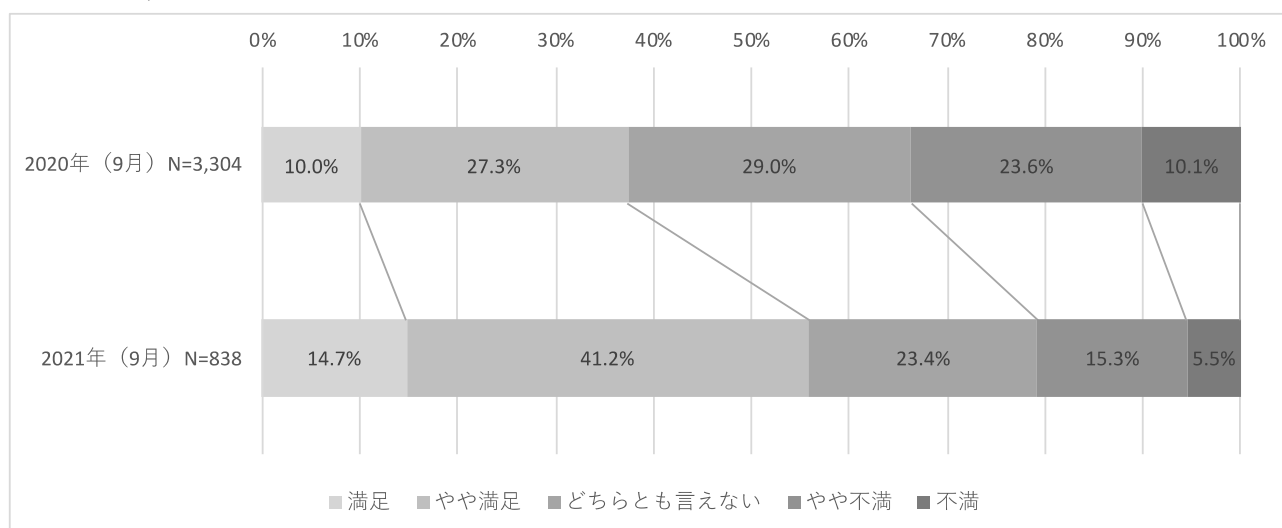


図 1-a. 大学生生活満足度の経年比較（全体比較）

ら、42.2% (79.5%-37.3%) の劇的な低下が見られ、一方で 2021 年の時点では「満足」と「やや満足」の合計が 55.9%に増加しており、コロナ禍前とまではいかないものの、一部回復が見られる。

次に、2020 年調査と 2021 年調査に共通に回答した 294 名の学部生の回答を比較した。母集団推定のため、同様に、5 件法の間隔尺度としての処理をした。2020 年時、2021 年時の平均値は順に 2.929、3.298 であり、平均値に関して対応のある t 検定を行った結果、 $t(293) = -5.301$ 、 $p < .05$  で有意であった。また、Cohen の効果量を算出したところ、絶対値は  $d = 0.324$  であった。そのため、共通回答者の結果からも、満足度の向上が確認できた。各選択肢を選んだ割合の変化を図 1-b に示した。こちらでは、「満足」「やや満足」が合計で 20%程度増加していることが読み取れ、全体としての傾向は図 1-a と同様である。

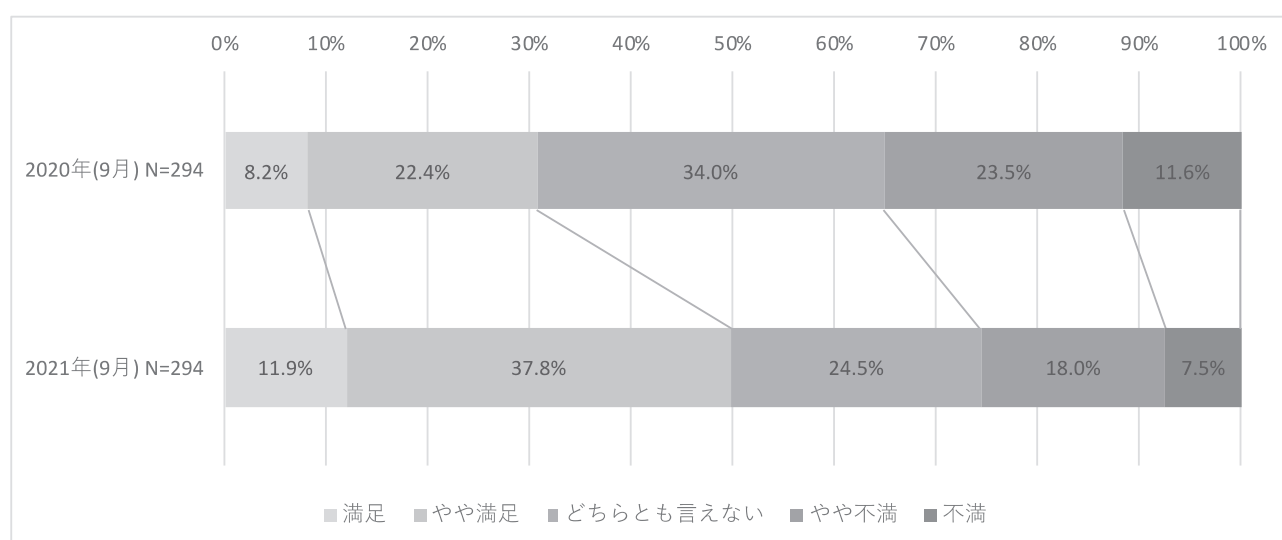


図 1-b. 大学生生活満足度の経年比較（共通回答者比較）

続いて、これらの変化をより詳細に追うために、サンキーダイアグラムを用いて推移の可視化を行なった（図 1-c）。この図は、2020 年調査時に「満足」「やや満足」「どちらとも言えない」「やや不満」「不満」の中から回答した人が、2021 年調査ではどれに推移しているかを、推移している人数が多いほど太い帯で示したものである。左側が 2020 年調査時、右側が 2021 年調査時の満足度の結果である。この図から、2020 年調査時に「満足」と答えた人（図中では「満足（2020）」と表現）は、この図を見ると多くが 2021 年調査時には「満足」と「やや満足」に推移している一方で、比較的小さな割合であるが、「やや不満」や「不満」に変化している学生もいることがわかる。また、2020 年調査時に「どちらとも言えない」「やや不満」と回答していた人の中から、2021 年調査時には少なくない割合が「やや満足」に推移していることが、全体として 20%程度、「満足」「やや満足」の合計に増加が見られた（図 1-b 参照）ことの大きな理由であることが図 1-c から読み取れる。すなわち、2020 年と 2021 年の調査時において、満足度が高かった学生は満足度をおおよそ維持し、一方で、中立的あるいはやや不満であった学生の満足度がある程度向上した結果、2021 年調査では全体としての満足度が向上したことがわかった。一方で、課題としては、2020 年調査で「不満」で

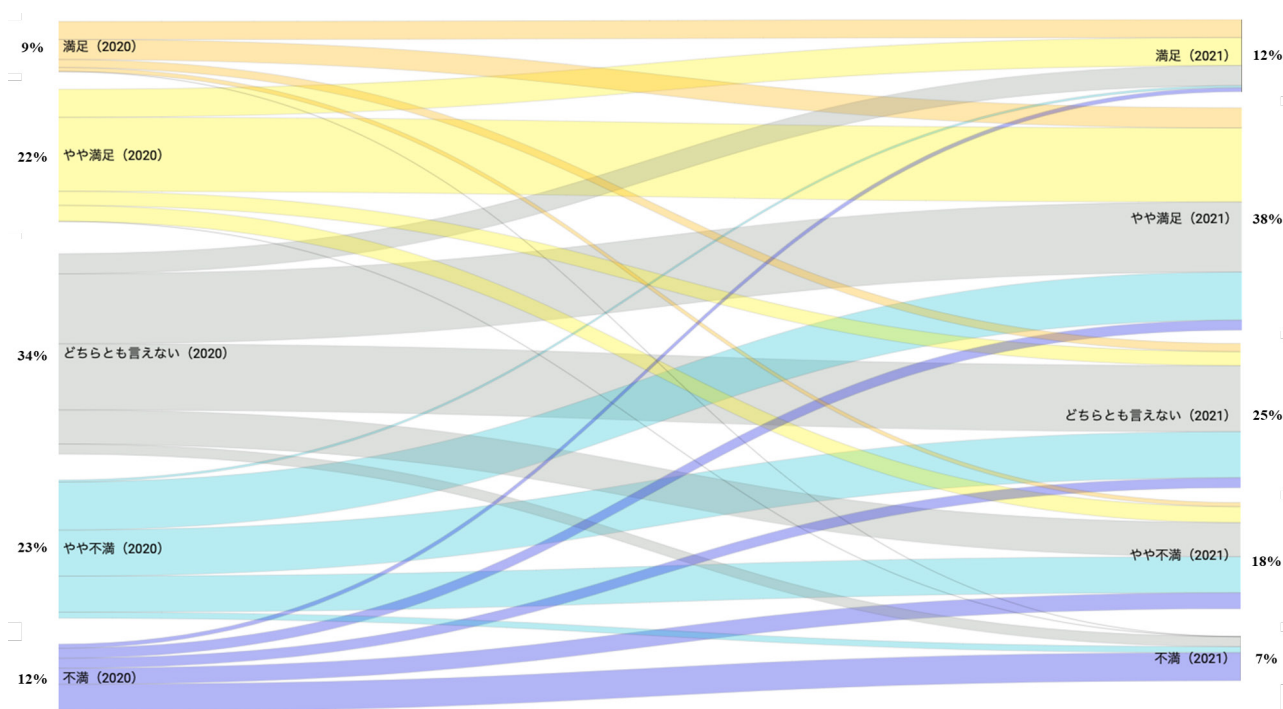


図 1-c. 大学生生活満足度の経年比較のサンキーダイアグラム（共通回答者比較）

左側が 2020 年調査時、右側が 2021 年調査時の結果を示している。なお、図中の%は、図 1-b のものを見やすさのために四捨五入して示している。

あった学生は、2021 年調査においても半数近くが「不満」にとどまっていることである。こうした学生の「不満」が何に根付くものなのかに関しては、今後より詳細な検討が求められる。

### 3.2. オンライン授業と対面授業の学びやすさ

この項目は、オンライン授業が対面授業と比較して、学びやすさの観点からどのように評価されるかを尋ねた項目である。まず、2020 年調査と 2021 年調査に関して、全体比較を行った。母集団推定を行った結果は以下の通りである。「上回る」を 5、「やや上回る」を 4、「おなじくらい」を 3、「やや劣る」を 2、「劣る」を 1 とし、5 件法の間隔尺度と見なした。なお、「わからない」は欠損値とした。2020 年時、2021 年時の平均値は順に 2.847、2.980 であり、対応のない平均値の差の検定（Welch 検定）を行った結果、 $t(1256.443) = -2.624$ 、 $p < .05$  で有意であった。また、Cohen の効果量を算出したところ、 $d = 0.025$  であった。全体比較の結果を図 2-a に示す。2020 年調査時に比べて、「上回る」「やや上回る」「同じくらい」の合計に 5%程度の増加が見られる。この期間で、対面授業と比較した際のオンライン授業の学びやすさの認識に若干の増加があったと言えよう。

続いて、共通回答者の回答に関しても同様に、5 件法の間隔尺度として処理し、分析を行った。2020 年時、2021 年時の平均値は順に 2.739、2.958 であり、平均値に関して対応のある t 検定を行った結果、 $t(260) = -2.787$ 、 $p < .05$  で有意であった。また、Cohen の効果量を算出したところ、絶対値は  $d = 0.170$  であった。共通回答者比較の結果からも、全体比較と同様の傾向が見られた。図 2-b には共通回答者比較の結果を示す。図 2-b の場合、「上回る」「やや上回る」「同じくらい」の合計に

10%程度の増加が見られたことがわかる。

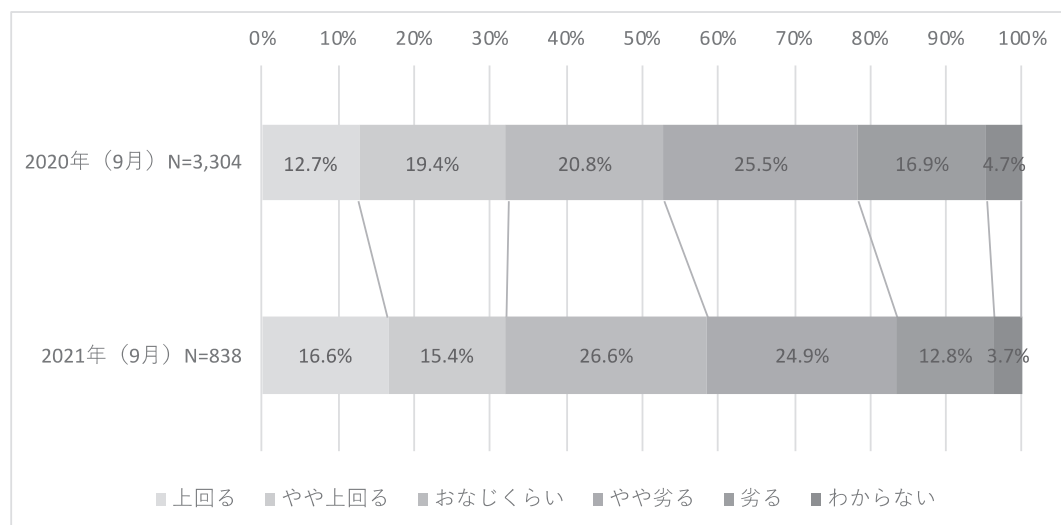


図 2-a. オンライン授業と対面授業の学びやすさの経年比較（全体比較）

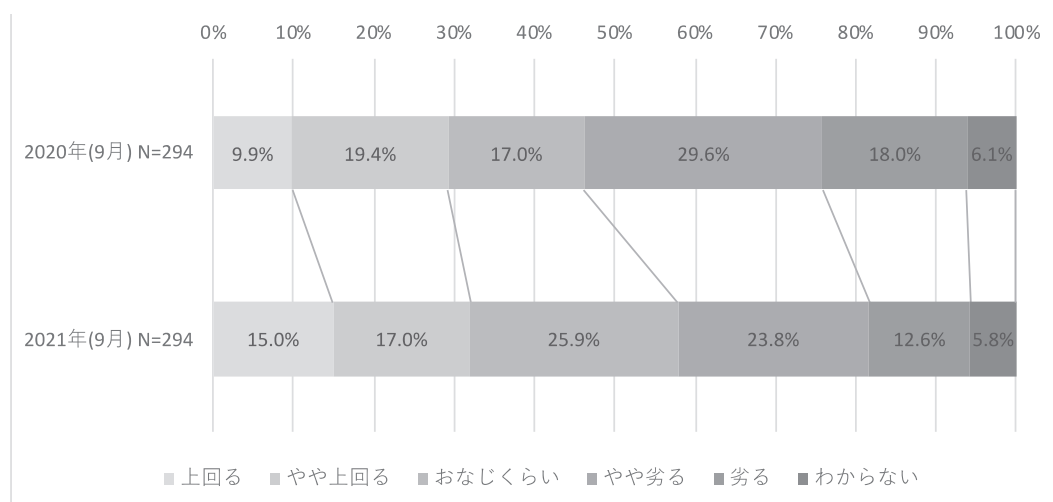


図 2-b. オンライン授業と対面授業の学びやすさの経年比較（共通回答者比較）

この結果をより詳細に分析するために、満足度の場合と同様、サンキードアグラマを使用してこの間の回答の推移を可視化した（図 2-c）。この図によると、まず、2020 年調査時に「上回る」「やや上回る」と回答していた人の多くは、2021 年調査時においても、「上回る」「やや上回る」あるいは「同じくらい」にとどまっている一方で、2020 年調査時に「やや劣る」と回答していた人が、2021 年調査時には「同じくらい」に大きく推移していることが、この間の「上回る」「やや上回る」「同じくらい」の合計が 10%程度増加していることの主な理由と考えられる。一方で、2020 年段階で「劣る」と回答していた人の多くは、2021 年時点でも「やや劣る」「劣る」に推移している人が大半であることもこの図から読み取れる。こうした層の存在も考えると、オンライン授業での学びやすさに関わる要因の究明と、その要因の改善を通じた質の向上を目指す一方で、必要に応じて対面授業も併用することで、多様な感受性を有する学生それぞれにとって学びやすい教育を提供してい

くことが重要であることがわかる。

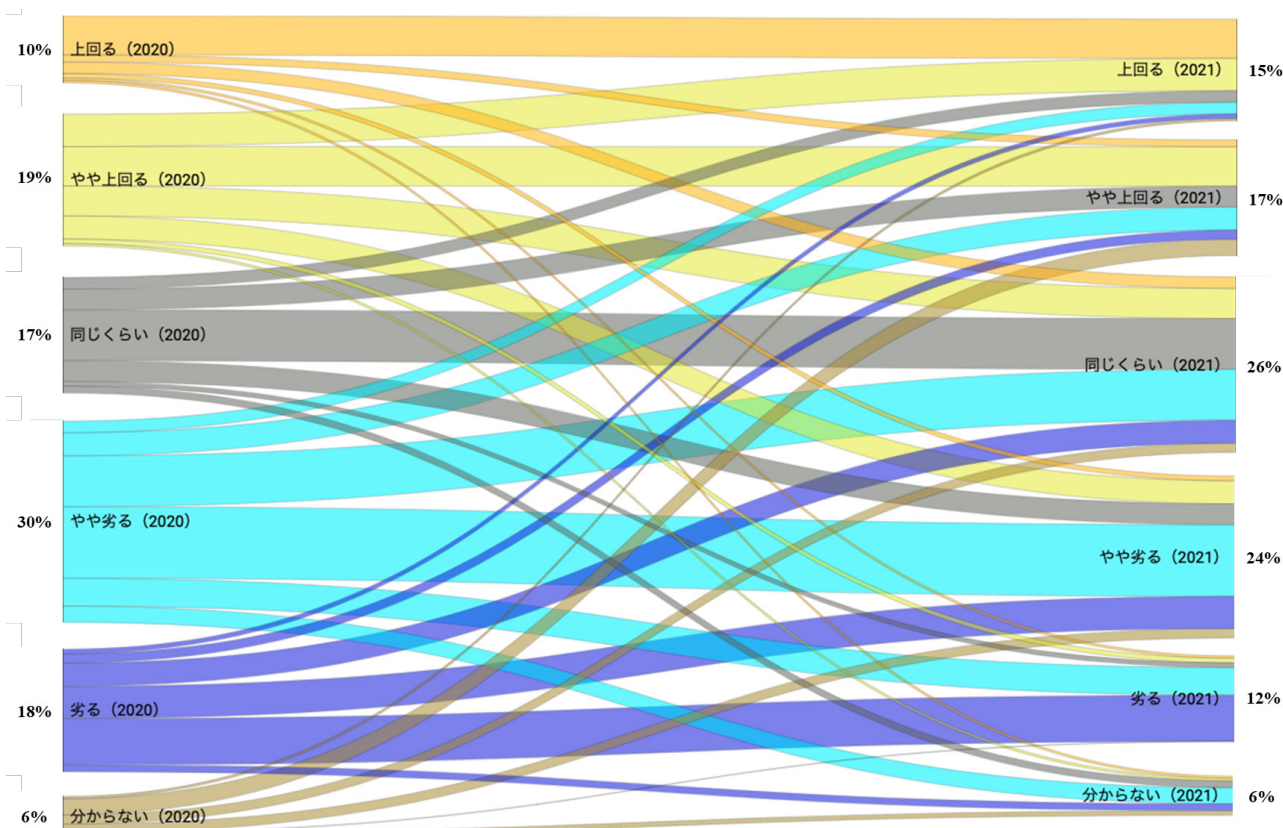


図 2-c. オンライン授業と対面授業の学びやすさの経年比較のサンキーダイアグラム  
(共通回答者比較)

左側が 2020 年調査時、右側が 2021 年調査時の結果を示している。なお、図中の%は、図 2-b のものを見やすさのために四捨五入して示している。

### 3.3. オンライン授業の不具合

2020 年前期より急遽始まったオンライン授業においては、当初、インターネット接続環境などを含め、授業自体を実施できるのかが大きく問題視された。すなわち、学生がそもそもネット接続の観点で、オンライン授業を問題なく受講できているかどうかが大きな問題であった。九州大学では、情報統括本部を中心とした情報基盤環境の整備や、オンライン授業サポート事務局である quickQ の開設<sup>10</sup>、オンライン授業の実施方法に関する研修、個々の教員による改善の努力、そして学生自身による対応等が行われてきた。こうした様々な取り組みの成果を見る上で、2020 年調査と 2021 年調査の結果の比較は重要である。

まず、全体比較を行った。カイ 2 乗検定の結果、 $\chi^2(1)=101.485$  で、 $p < .05$  で有意に「あった」の割合が減少していることが確認された。図 3-a に、推移を示す。2020 年調査時に比べ、2021 年調査時では、不具合が「あった」とする回答が 20%弱減少している。上記のような取り組みにより、この間、学生がよりスムーズにオンライン授業を受講できるようになってきていることが伺える。一方で、依然として半数以上の学生たちが不具合を経験したことは、各学生に対する同等な教育の

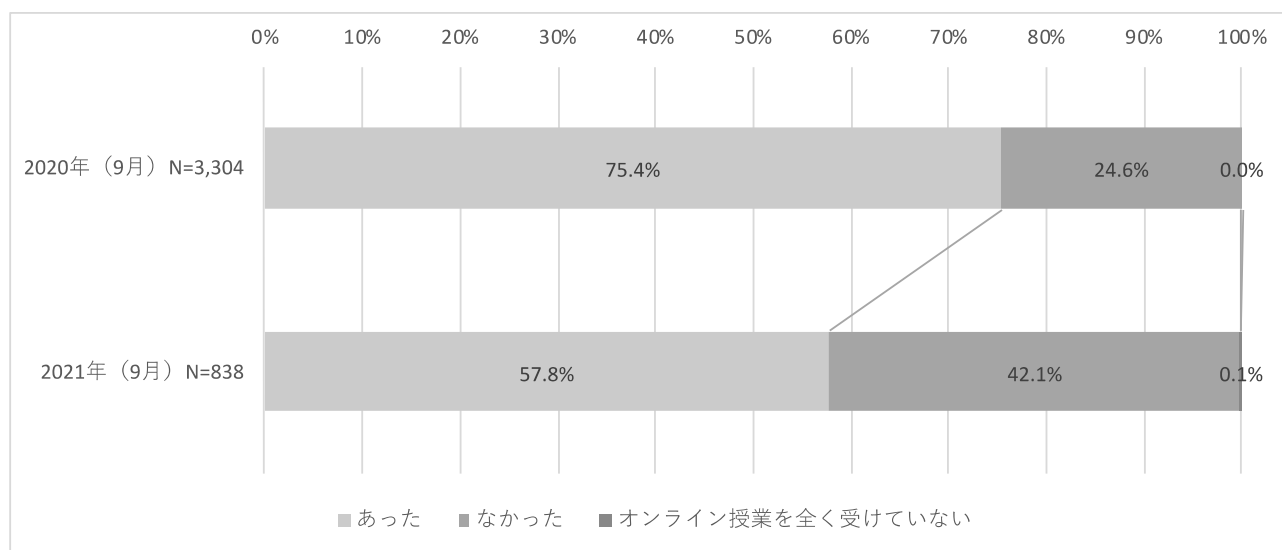


図 3-a. 受講中の不具合の経年比較（全体比較）

質、教育環境の提供という、教育機関としての前提条件を損ないかねない。そのため、至急その原因を把握し、問題を解決する必要がある。

次に、共通回答者の回答を比較した。カイ 2 乗検定の結果、 $\chi^2(1)=9.645$  で、 $p<.05$  で有意に「あった」の割合が減少していることが確認された。図 3-b に推移を示した。全体比較が、1 年生のデータを多く含んでいた一方で、図 3-b のデータには、2020 年と 2021 年に九州大学でオンライン授業を受講した学生のみしか含まれていないため、このデータはより純粋に、トラブルの減少を判断する上で有用である。この図によると、トラブルが「あった」とする回答が 32%低下しており、全体比較よりも大きな低下が見られる。

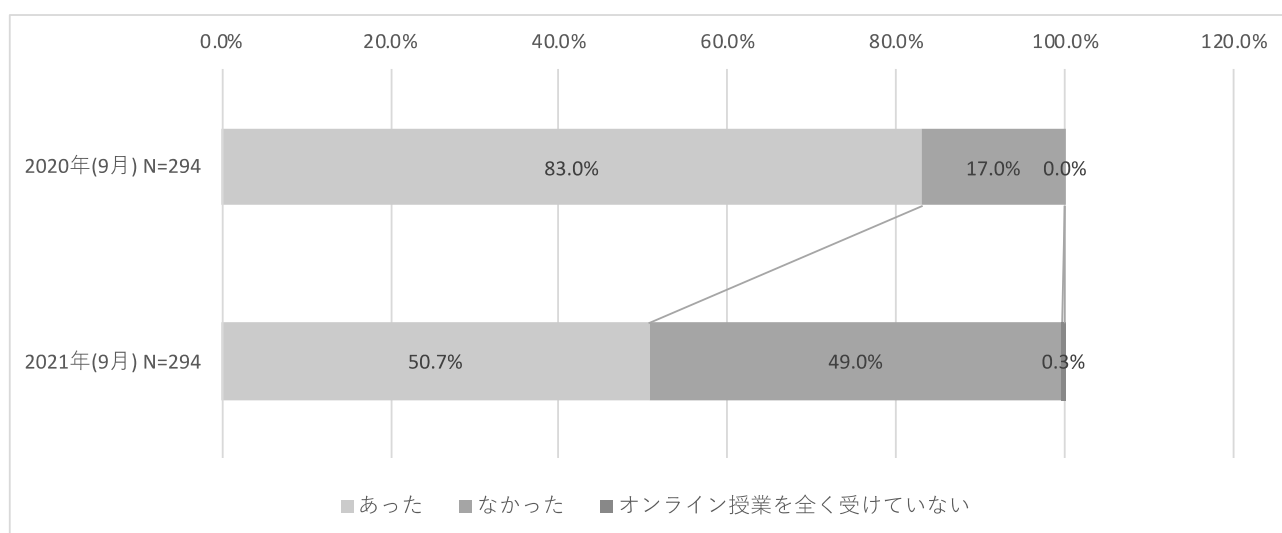


図 3-b. 受講中の不具合の経年比較（全体比較）

このように、オンライン授業をより円滑に受講できるようになっている一方で、図 3-a、図 3-b に共通して、依然としてトラブルを経験している学生も 5-6 割存在することも明らかになった。今後、

コロナ禍中の緊急事態措置としてのオンライン授業ではなく、コロナ禍後においてより日常的に大学の授業の中にオンライン授業が定着していく場合を想定すると、こうした学生への対応はより重要な課題となる。

### 3.4. オンライン授業の受講態度・感想

2020 年、2021 年アンケート調査では、コロナ禍の中での大学生生活全般に関する受講態度・学習支援・健康・受講環境等に関する幅広い質問が尋ねられた。以下、全体比較、共通回答者比較の順に説明する。

全体比較において、カイ 2 乗検定の結果、図 4-a でアスタリスク (\*) をつけた 8 項目（例：自分のペースで学習ができてよかった）に関しては、5%水準で有意差が見られた。2020 年調査時に比べ、2021 年調査時では、「自分のペースで学習ができてよかった」(+10.0%)「十分に予習復習ができた」(+5.7%)、「自宅でのオンライン授業や学習に際し、図書館の資料が使えなくて困った」(-20.9%)「目の疲れ、腰の痛みなどの症状が出た」(-12.7%)、「自分の周りの音が気を散らした」(-4.5%) など、学習態度、学習支援、健康、環境に関して、全般的にポジティブな変化が見られた。2020 年度と比較して 2021 年度はオンライン授業の数自体が減ったこともあるが、「目の疲れ、腰の痛みなどの症状が出た」「自分の周りの音が気を散らした」の割合が減少したことは、学生の方で、オンライン授業への適応が始まっている可能性を示唆している。また、「自宅でのオンライン授業や学習に際し、図書館の資料が使えなくて困った」という否定的な項目に同意した割合には大きな減少が見られた。この理由としては、教員の適切な電子リソースの提供、学生の情報検索スキルの向上、図書館における電子リソースの提供などが挙げられる。これらは過去 1 年間教員と学生がオンライン環境に順応し、また、大学側のオンライン環境における学習活動に対する積極的なサポートの充実化が合わさった結果であると言える。

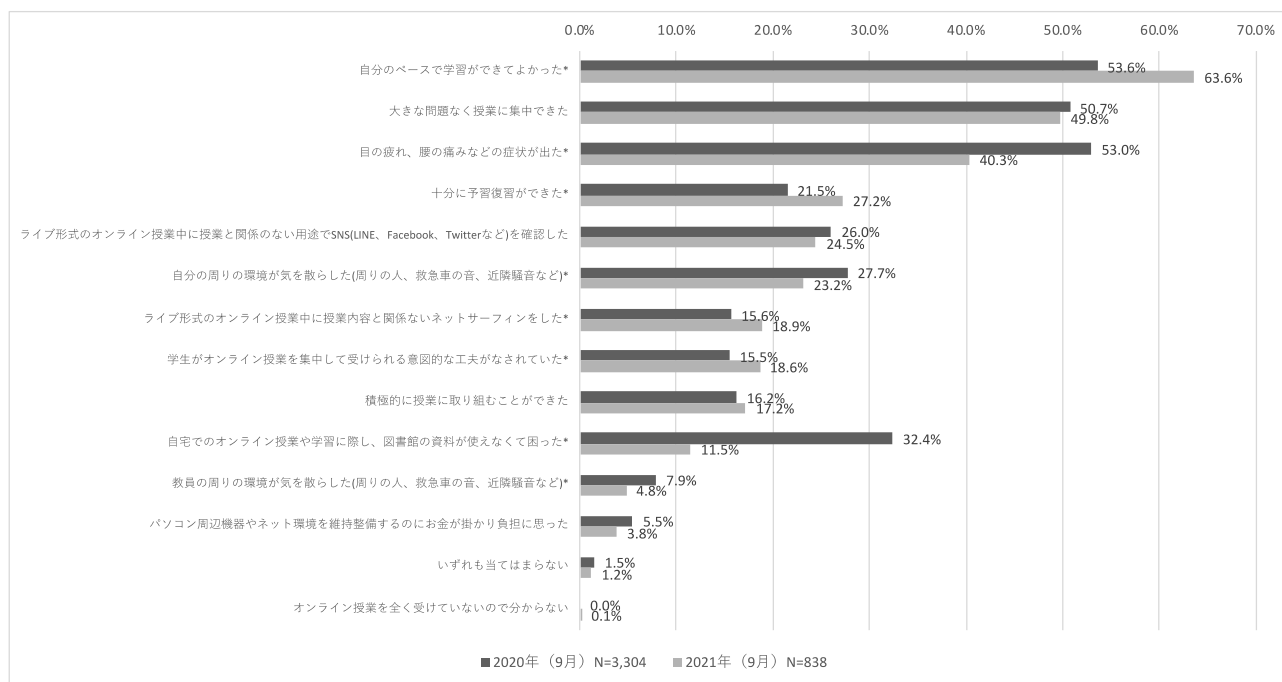


図 4-a. オンライン授業の受講態度・感想の経年比較（全体比較）

一方で、共通回答者比較の結果（図 4-b）を見ると、このような単純な結論は導き難いことが指摘できる。共通回答者 294 名の結果をカイ 2 乗検定で分析した結果、「いずれも当てはまらない」を除く全ての項目で 5%水準で有意差が見られた（図 4-b でアスタリスク（\*）を付した）。以下、図 4-a と図 4-b を比較しながら説明を行う。まず、図 4-a では見られた「自分のペースで学習ができて

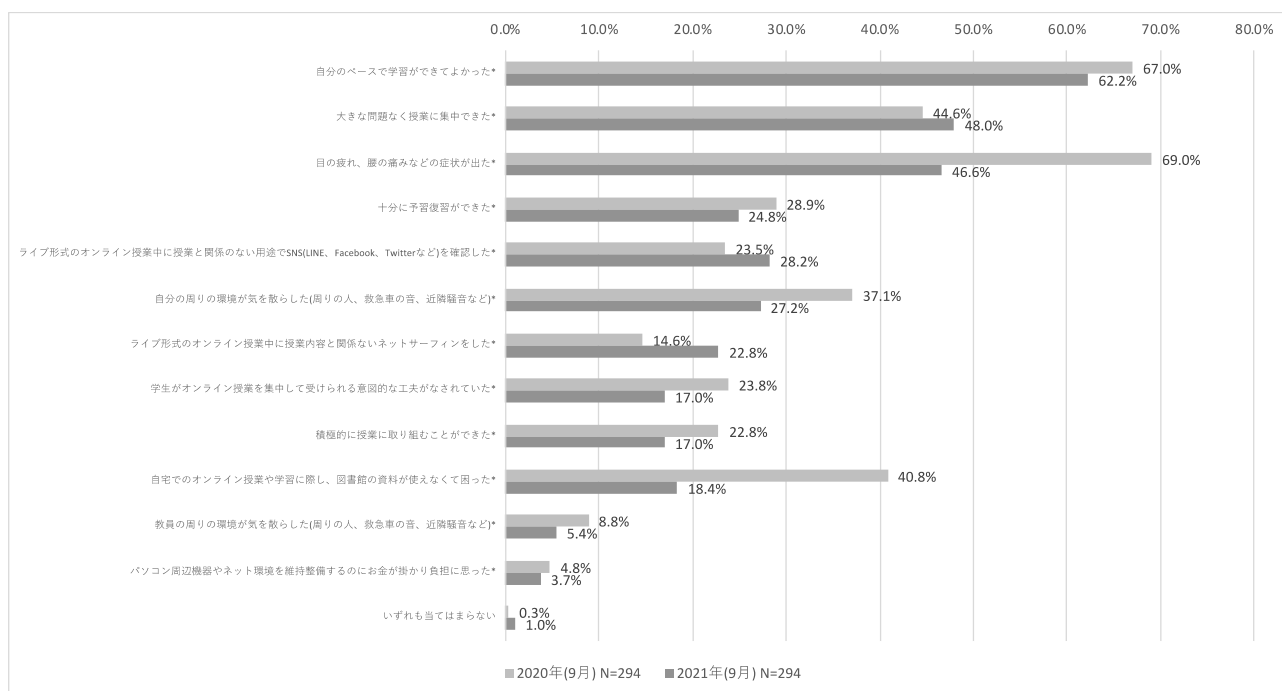


図 4-b. オンライン授業の受講態度・感想の経年比較（共通回答者比較）

よかった」「十分に予習復習ができた」における割合の増加はいずれも確認できなくなっている。また、「ライブ形式のオンライン授業中に授業内容と関係ないネットサーフィンをした」に同意する割合の増加は図 4-a よりも大きく、「積極的に授業に取り組むことができた」「学生がオンライン授業を集中して受けられる意図的な工夫がなされていた」に同意する回答は減少していた。これらの結果から、昨年度から引き続きオンライン授業を受講している学生にとっては、オンライン授業への「馴化(habituatation)」が生じている可能性が指摘できる。馴化とは、同一の刺激が繰り返されることで、初めは誘発されていた刺激が次第に生起しなくなることを意味する心理学の概念である。こうした馴化については、図 4-a からは読み取ることができない。なぜなら、図 4-a における全体比較の回答者には、1 年生も多く含まれているためである。1 年生にとっては、大学でのオンライン授業は初めての経験であり、さまざまなことが新鮮にうつり、予習復習などをはじめとして、積極的かつ真剣に授業に参加した可能性がある。一方で、昨年度からオンライン授業を受講し続けている学生にとっては、馴化により、予習復習をしだいにしなくなったり、たとえ教員が新しい工夫をしたとしても、「学生がオンライン授業を集中して受けられる意図的な工夫がなされていた」に同意しなくなったということが考えられる。共通回答者に絞って経年比較を行うことで、このような馴化の可能性が浮き彫りになった。従って、図 4-a の結果のみを持って、オンライン授業におけるメリットがより享受され、デメリットが低減したというような楽観的な結論は導き難い。むしろ、オンライン授業は「自分のペースで学習ができてよかった」「大きな問題なく授業に集中できた」「十分に予習復習ができた」というようなメリットももたらしうるが、学年進行に伴う馴化の影響も強く受けるということが暫定的な結論と考えられる。

以上、図 4-a と図 4-b では、同様の結果が得られたケースと、異なる結果が得られたケースが混在したことは興味深い。特に、オンライン授業への馴化は、今後オンライン授業が継続される場合より鮮明に浮き彫りになる可能性があるため、今後改善案を考える必要もあるだろう。

### 3.5. オンライン授業の改善指摘事項

以上見てきた 4 項目は現状に焦点を当てていた。一方、この項目は今後のオンライン授業のあり方に焦点を当てており、オンライン授業として改善が必要なのはどのような事項かに関して尋ねている。

まず、全体比較に関して、カイ 2 乗検定の結果、「オンライン授業を全く受けていないので分からない」を除く全ての項目で、5%水準で有意差が見られた（図 5-a でアスタリスク（\*）を付した）。図 5-a より、2020 年調査時に比べ、2021 年調査時では、「オンライン授業に相応しいパソコン、カメラ、マイクなどのデバイスや自宅のネット環境整備」を除く全ての項目で 5%以上の低下が見られたことがわかる。最も減少の大きかったものは「大学が提供する e ラーニングプラットフォーム（Moodle など）や会議ツール（Teams など）の使いやすさの改良」であり、10%以上の減少が見られた。また、2020 年調査時に必要性が大きく指摘された 2 点「評価方法（試験の実施方法や成績の付け方、出席確認方法の改善）」「自宅のパソコンやネットワーク関連スキルの向上」に関しても 7-8%弱の低下が見られた。これらに代表されるように、ここにあげた改善指摘事項に関しては昨年度より要望の声は少なくなっていることが伺える。一方で、減少はしてはいるものの、依然として要望の声があることも事実であるため、今後オンライン授業を継続していく場合には、これらの課題の解決が求められる。

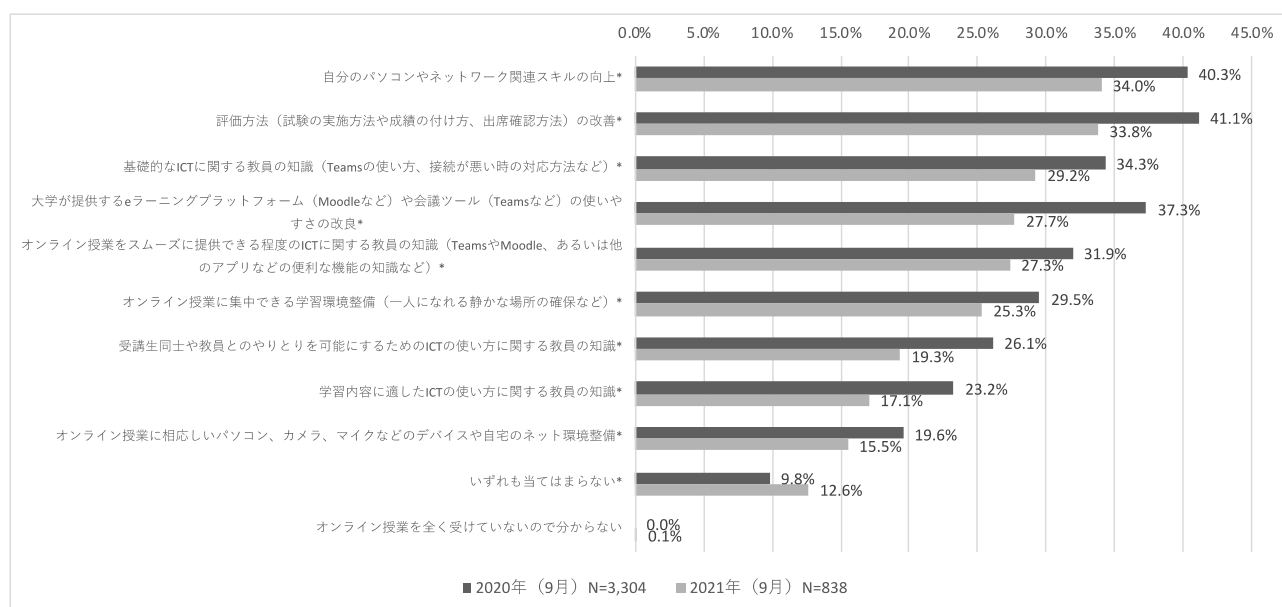


図 5-a. 改善指摘事項の経験比較（全体比較）

次に、共通回答者比較の結果を図 5-b に示した。共通回答者 294 名の結果をカイ 2 乗検定で分析した結果、全ての項目で 5%水準で有意差が見られた（図 5-b でアスタリスク（\*）を付した）。これを見ると、図 5-a と同様の傾向が見られ、多くの項目で図 5-a よりも大きな低下が見られる。特に、自分のパソコンやネットワークスキルの向上については、22%の大きな低下が見られ、昨年度から継続的にオンライン授業を受講している経験が学生のスキルを向上させたということが伺える。依然として改善が必要とする事項は残っているが、これらの結果はこの一年間でオンライン授業の受講に必要なさまざまな要望が大きく改善されたことを示している。

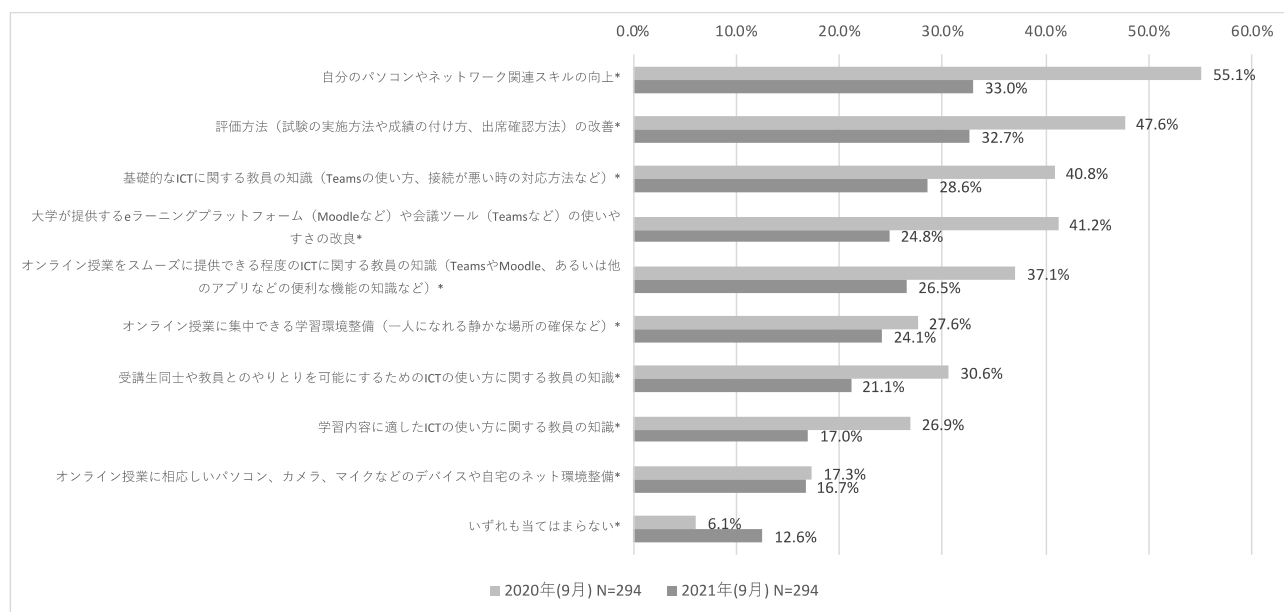


図 5-b. 改善指摘事項の経験比較（共通回答者比較）

## 4. 結論

### 4.1. 本報告のまとめと意義

本報告では、2020 年と 2021 年に九州大学で行われたオンライン授業に関するアンケート調査の共通項目を比較することで、この間に起きた変化を定量的に検討してきた。この結果、主に明らかとなったことは以下の通りである。

第一に、2020 年から 2021 年の間に、全体的に学生生活満足度が向上したことが分かった。そして、共通回答者のみを比較した結果、2020 年の段階でそもそも満足度が高かった学生は 2021 年調査時にも満足度をおおよそ維持し、一方で、2020 年の段階で中立的あるいはやや否定的であった学生の満足度がある程度向上していたことが確認できた。2019 年から 2020 年にかけて学生生活満足度が低下していることが指摘されていた<sup>8</sup>が、コロナ禍中において回復の兆しが見られ、これはこの間にとってきた大学の対応が一定程度有効であったと見ることもできよう。

第二に、オンライン授業と対面授業での学びやすさを比較した結果、学びやすさの認識に若干の増加が見られた。共通回答者のみを比較した結果、2020 年調査時に「やや劣る」と回答していた人が、2021 年調査時には「同じくらい」に大きく推移していることがわかった。これは、オンライン授業の質の向上を示している可能性がある。

第三に、オンライン授業の不具合に関して検討した結果、2020 年から 2021 年にかけて状況としては改善していた。一方で、未だ通信のトラブルは存在するため、オンライン授業の円滑な運営のためには、今後もこれらの問題解決に取り組む必要があると考えられる。

第四に、オンライン授業の受講態度・学習支援・健康・受講環境等の比較からは、全体比較の場合と共通回答者のみを比較の場合の結果の間で異なる結果が観察された。つまり、全体比較では、

受講態度・学習支援・健康・受講環境に関するあらゆる質問項目においてポジティブな結果が得られたが、共通回答者比較では、学習支援・健康・受講環境が改善された一方で、受講態度がむしろ悪化した結果が見られた。これらの結果を総合すると、オンライン授業はより肯定的に受け止められるようになっているものの、継続的にオンライン授業を受講することによる「馴化」も見られた、というのが暫定的な結論と考えられる。今後もオンライン授業を実施するのであれば、こうした「馴化」も視野に入れて、オンライン授業の実施方法・改善策を検討する必要がある。

第五に、オンライン授業の改善指摘事項に関しては、全ての項目で改善が見られた。この結果は、この一年間で大学として課題に真摯に取り組んできた結果が顕在化したと見て良いだろう。一方で、未だ一定の課題は根強く残っているため、2020年の調査時よりも改善したとはいえ、今後もこうした課題の解決に取り組むことが重要と考えられる。

本報告は、コロナ禍以前とコロナ禍が始まって最初の年である2020年を主な対象としていた先行研究や調査と異なり、コロナ禍中に焦点を当てて、学生アンケートの結果を比較したものである。ここでの分析の結果、コロナ禍という緊急事態から始まったオンライン授業ではあったが、改善に向けての努力を続け、それが一定の効果を生み出し、また、学生側もそれに対応・順応してきている姿が見られた。コロナ禍以前との比較により、大学生活への様々な負の面がクローズアップされることが多かった一方で、この調査の結果は、このような不測の事態においても、真摯に対応を続けてきたことの結果、そして今後オンライン授業を継続していく上で、未だ残された課題は何かを提示した点で意義が大きいと考えられる。

## 4.2. 本報告の限界と残された課題

本報告の限界と課題は大きく次の2つである。第一に、対象集団の量と質である。本報告では、母集団推定も行ったが、分析に用いた2つの調査は、回答者の数が大きく異なる。そのため、全体比較の結果をフォローする形で、2つの調査にともに参加した294名の回答を用いた分析結果も示してきたが、これらの結果を元に強い主張を行うことは難しい。変化を追う上では、やはり同一の対象者をより多く集め、回答してもらう必要があるため、この点は今後の課題である。

第二に、原因に関しての解釈である。本報告では、例えば満足度の増加に関してサンキーダイアグラムを用いることで、より詳細に回答の推移を検討した。一方でこれは、「何が起きたのか」のより詳細な検討には向いているが、「何がその結果を引き起こしたのか」の点では情報をもたらしにくい。このようなサンキーダイアグラムの結果の解釈も含め、本報告で行った解釈は、いわば今後検証することが求められる仮説的なものである。そのため、他の変数との掛け合わせによる量的分析や、特徴的な推移を示した回答者に対しての追加のインタビューなどにより、原因を追求する研究が今後求められよう。

## 謝辞

2020年調査、および、2021年調査は、九州大学において実施されたものです。実施にご尽力を頂

いた関係各位、特に、九州大学学務部学務企画課、基幹教育・共創学部課、教育改革推進本部企画評価部門、基幹教育院、および、授業等の在り方に関する検討ワーキンググループの皆様に感謝申し上げます。さらに、図表の作成にあたり、教育改革推進本部テクニカルスタッフの渚上佑子さんにご協力いただきました。ここに記して、御礼を申し上げます。

## 参考文献

- <sup>1</sup> 広島大学高等教育研究開発センター：「新型コロナウイルスをめぐる大学教育・オンライン授業等に関する調査研究の動向（情報リンク集）9月4日更新分」(<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/2020/10/9-4-4/>), n.d.
- <sup>2</sup> 九州大学：「九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート（春学期）結果について」([https://www.kyushu-u.ac.jp/f/40309/20\\_08\\_11\\_01.pdf](https://www.kyushu-u.ac.jp/f/40309/20_08_11_01.pdf)), 2021.
- <sup>3</sup> 早稲田大学：「オンライン授業に関する調査結果（2020年度春学期）」(<https://www.waseda.jp/top/news/70555>), 2020.
- <sup>4</sup> Times Higher Education：「コロナ前後の学生満足度の変化は？～THE「学生調査」経年比較から見た日本の教育の課題～」(<https://japanuniversityrankings.jp/topics/00201/>), 2021.
- <sup>5</sup> 日本学生支援機構：「平成30年度学生生活調査」([https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_chosa/2018.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/2018.html)), 2018.
- <sup>6</sup> 日本学生支援機構：「平成30年度学生生活調査結果（集計表）」([https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2021/03/09/data18\\_2.pdf](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2021/03/09/data18_2.pdf)), 2021.
- <sup>7</sup> 日本学生支援機構：「令和2年度学生生活調査結果」([https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2021/09/24/data20sokuhou.pdf](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2021/09/24/data20sokuhou.pdf)), 2021.
- <sup>8</sup> 梶谷康介、岸本裕歩、土本利架子、長沼祥太郎、鄭漢模、野瀬健、田中真理、丸山徹、丸野俊一：「新型コロナウイルス感染症パンデミックが大学生の生活・健康・心理に及ぼした影響」, 全国大学保健管理研究集会プログラム・抄録集, p.90, 2020.
- <sup>9</sup> 九州大学：2019年度学生生活実態調査報告書, 2020.
- <sup>10</sup> 島田 敬士、野口 岳：「学生主体のオンライン授業サポート体制構築と他機関への展開の可能性」([https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200529-6\\_ShimadaNoguchi.pdf](https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200529-6_ShimadaNoguchi.pdf)), 2020.